

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本教育プログラムでは、100%の学生が履修する卒業必修科目の「経営情報概論」から履修を開始し、本教育プログラム修了要件の必修である「統計学概論」「データエンジニアリング基礎」「AI基礎」「ビジネスインテリジェンス」について、2、3年次にかけて履修を促している。「経営情報概論」は1年次配当かつ経営学部卒業必修であるため、経営学部における本教育プログラムの履修着手率は100%となっている。このため、履修率の目標は100%であり、本教育プログラム開始後の年度の進行に加え、収容定員及び充足率の推移を考慮すると、履修率は計画通りの進捗であるといえる。 一方で、経営学部の各専門コースへの所属は2年次から開始するようになっており、例年、2年次の学生のうち約30%が経営情報コースに所属している。そこで、本教育プログラムの修了を目指して学修を進める学生の割合として、修了率30%を当面の目標として設定している。他のコースの学生に対しても履修を強く推奨していることから、今後の推移を踏まえて修了率の目標設定は検討を加えていく。 本教育プログラムは令和5年度カリキュラムから開始し、令和7年度に3年次配当科目「AI基礎」「ビジネスインテリジェンス」が開講され、これらの科目の修得を以って修了となるため、令和6年度の時点では修了者を出すに至っていない。
学修成果	本教育プログラムを構成する各授業科目について、成績データを分析している。また、学生による授業評価アンケート調査の結果も、これを裏付けているといえる。これらをもとに個々の授業内容や本教育プログラムの構成について、改善に向けた取組を行う。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	学生による授業評価アンケート調査の結果、卒業必修科目「経営情報概論」について、設問「授業内容は分かりやすかったですか」に対して「非常にそうである」「そうである」と回答した学生は68%に達しており、内容の理解度について比較的良好な結果が得られている。また、「統計学概論」では63%、「データエンジニアリング基礎」では50%であり、理解度の状況として一定の成果が得られた。 今後の授業改善にあたって、内容の精選や教授法及び教材の工夫により、数理的な内容に苦手意識を持つ学生にとっても分かりやすく意義の感じられる授業を目指している。本教育プログラムを構成する他の科目についても、優れた教育プログラムとなるよう取組む。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	学生による授業評価アンケート調査の結果、卒業必修科目「経営情報概論」について、設問「授業を通して学問や勉強に対する意欲・興味が増しましたか」に対して「非常にそうである」「そうである」と回答した学生は58%に達している。「統計学概論」では44%、「データエンジニアリング基礎」では50%であった。また、設問「総合的に判断して、この授業に満足していますか」に対して「非常にそうである」「そうである」と回答した学生は、「経営情報概論」では58%、「統計学概論」では69%、「データエンジニアリング基礎」では50%であった。これらから、後輩学生に対する推奨度については、否定的な考えを有する学生は少ないものと推測できる。他の科目についても状況は良好である。 今後の授業改善にあたって、内容の精選や教授法及び教材の工夫により、数理的な内容に苦手意識を持つ学生にとっても分かりやすく意義の感じられる授業を目指している。本教育プログラムを構成する他の科目についても、優れた教育プログラムとなるよう取組む。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本教育プログラムを構成する科目群は、いずれも経営学部専門科目により構成される。高松大学経営学部では、経営情報コース所属の学生だけでなく、他のコースの所属学生に対しても履修を強く推奨している。また、他学部からの受講希望者に対し、授業科目担当教員の許可の下で受講を認めている。他学部の受講者が単位を修得した場合、当該学部においては全学共通科目の単位として取り扱い、卒業要件単位として計上している。令和6年度において他学部からの受講はみられなかった。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本教育プログラムは令和7年度開講科目の履修をもって修了者が出る予定であるため、現時点においては本項目の評価は得られていない。本教育プログラム修了者が卒業後、企業等においてどのような評価を獲得できるのかの調査方法については、本学卒業生が所属する企業への調査などで実施する予定である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本教育プログラムでは、数理・データサイエンス・AIについての実践的活用能力を身につけ、企業における課題発見及び課題解決に活かせる人材の育成を目指している。また、情報セキュリティや情報倫理の観点から、不適切な利用を防止できることを目的としている。地域社会に対しては本教育プログラムの意義について周知を図る必要がある。 本教育プログラムは令和7年度開講科目の修得をもって修了者が出る予定であるため、そのタイミングで学外からのフィードバックが得られるよう、また、継続的にフィードバックが得られるよう、学内外の仕組みを整えていかなければならない。外部評価委員や産業界からの意見を収集し、本教育プログラムの改善に向けて取り組まなければならない。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	各授業科目においては、授業内でタスクを課し、それができるようになるまで個々の学生に対し粘り強く向き合う授業展開を行うことで、学生が実践経験を積み重ねることができるよう配慮をしている。学生同士が相互にコミュニケーションを図りながらタスクに取り組むことを奨励し、躓きがちな学生に対応しながら学修を進めている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること ※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載	Google Classroomを活用することで、学生は随時反復学習を行うことができるようになっている。また、授業改善の取組みとして、学生による授業評価アンケート調査の結果に対して、授業担当教員がフィードバックコメントを回答するとともに、次の5項目の観点をもとに次年度の授業の改善を図っている。1. 具体例やアナロジーを用いる、2. タスク指向の学習を採用する、3. グラフや図、動画などの視覚的補助を用いる、4. フィードバックを積極的に行い、学生が正確に理解しているかどうかを確認できるようにする、5. シミュレーションなどで実験的・試行錯誤的な要素を用いる。また、BYOD(持込PC)を活用した学修の在り方の模索にあたっては、本学情報処理教育センターと連携するとともに、オンデマンド学習教材の活用も検討しなければならない。